法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

日本文化史の探訪者 ： アン・ヘリング教授

楠本, 君恵 / KUSUMOTO, Kimie

(出版者 / Publisher)
法政大学経済学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
経済志林 / The Hosei University Economic Review
(巻 / Volume)
76
(号 / Number)
3
(開始ページ / Start Page)
43
(終了ページ / End Page)
58
(発行年 / Year)
2009-03-09
(URL)
https://doi.org/10.15002/00003882

【紹　介】

日本文化史の探訪者
――アン・ヘリング教授――

楠　本　君　恵

日本語との出会い

「先生がそもそも日本に関心を持たれたきっかけは何だったのでしょう？」つい最近，短時間でしたけどお聞きする機会がありました。元々日本の文化に引かれたのは音楽からだったようです。太棹（ざお）三味線の音色に触れた時，運命を決せられたように思ったそうです。たまたま，ワシントン大学内の東洋研究所という所で実験的に日本語特訓クラスの学生を募集していることを知って，さっそく応募し，１日７時間の集中授業で，１年で母語のように０歳から中学１，２年までの日本語をマスターする，つまり１年で言語そのものを習得するという画期的な理論の実践を目ざす，それは厳しい授業を受けられたのだそうです。８人の学生のうち２人はドロップアウトしたとか。

一学期：第二母語を形成する。

二学期：幼稚園児と同じレベルの言語生活を始める。
「日」，「月」から始まって教育漢字までマスターする。

三学期：当用漢字をマスターし，永井荷風，加藤周一，宮沢賢治などの作品を読む。

このような試練を経て，フランス語，英語，日本語に堪能な指導教官に

「丸ごと母語」の日本語教育の洗礼を受けられたのだそうです。その後,先生はその方法でドイツ語を学び直して独語検定で一級を取得し，ヴィーン大学ではドイツ語で講義をなさっておられます。内容は,「日本の子供の本の出版史」,江戸から東京までの「日本の服装史」,「模様の歴史」などだったようです。

ワープロのない時代に漢字を覚え，書くことは，特に日本語が元々の母語でない人にはそれは大変なことだったでしょう。それも，日本に来てからの，活字文化でない時代の出版物を読み解く，後のお仕事に比べたら，何でもなかったかも知れませんが。

実践活動

アン・ヘリング先生の多彩なご活躍を一言で言いますと，明治初期，またそれ以前の日本の文化，主に出版・印刷に関わる児童文化の研究と言えると思います。先生は，日本の土壌の中で生まれ，大勢の人々によって大事に育成され，幾星霜を経て生き残った主に紙で出来た日本の文化遺産に限りない理解と愛着を持って研究及び実践活動を続けてこられました。先生をご紹介するには，まず実践活動から始めるのがいいかと思います。

実践活動の中には，(1) 収集とその収集物の開示があります。先生ほど豊かなこの分野の資料収集をしておられる方は日本でも数少ないと思います。見せていただいたことも，おそらくご本人も即答に窮するだろうその総数をお聞きしたこともありませんが，展覧会に依頼出品なされた収蔵品のカタログの一部を見ただけでその水中に隠れた氷山の大きさが推測できます。例えば，1986年８月に東京都庭園美術館で開かれた「日本の子供の本歴史展」に出展された334品の出展品のうち，ヘリング先生のものは94品を数えます。それも，〈小本・豆本〉〈双六〉〈おもちゃ絵〉〈外国語に翻訳された子ども本〉の部門に限ってです。

次に (2) その展示のためのカタログ紹介があります。カタログにして紹

介するためには，膨大な時間をかけての下調べが必要でしょう。日本で生まれ，子供のころから毛筆の掛け軸や，絵画の掛け軸に添えられた讃，扁額，襖絵の讃などを見て育ち，毛筆書道をたたき込まれた私たちでさえ判読困難な変体仮名や草書，行書で書かれた版木刷りの文字を解読しなければならないのです。日本に生まれた自分の怠け者さ加減が恥ずかしくなるような難解なお仕事を先生はこなされたのです。

次が学者としてのヘリング先生の本領でしょうが，（3）その一次資料を使っての日本の児童文学，児童文化についての論考です。後で詳しく触れますが，西欧諸国の同時代の文化に並ぶとも劣らない，江戸時代の庶民文化から発生した子供用の「おもしろくてためになる」種々の出版物を，軽視あるいは無視した日本の児童文学史には，豊かな一次資料を物的証拠として激しく異を唱えています。

そのヘリング先生の冷静で世界的視野に立った公平な視点は社会が放って置きませんでした。次に特記すべき仕事は（4）公立図書館の評議員，資料館・美術館・郷土館でのプロジェクトへの協力です。関わった主な公立機関と役職は，杉並区立図書館評議員，東京都立中央図書館評議会委員，プロジェクトに関わった地域・機関は，福島県三春町・福生市・飯能市・東京都庭園美術館・逓信博物館・メディア総合研究所・東北大学・オーストリアなど広範囲に及びます。

同時に（5）講演会活動も熱心になさっておられます。江戸時代から明治，大正，昭和初期に至る日本の出版文化に関して，様々な角度から聴衆のニーズに合った講演でその知識を披露してこられました。20数年前のことですが，私は多摩図書館で先生の講演をお聞きしたことがありました。その時，長い間言葉で知っていて，愛読書のタイトルでもあった「ホーン・ブック」を初めて見せてもらい感動しました。牛の角を薄い板状に削り大判の羽子板のようにしたその実物に子供たちの学習用のアルファベットが書かれていました。

ヘリング先生の講演活動は，多くの人を感動させたことでしょう。多く

の講演活動の中には，ボン大学でドイツ語で行った「近世日本の昔話挿し絵本考」「隠された諷刺:小林清親の絵物語を見つめて」の他に，ヴィーン大学での「公の秘密：応援団の制服の過去と現在―東京六大学を中心に」「日本でいう応援団とはなんだろう…？:大学スポーツ界を活性化する応援団とその役割」といったユニークなものがあります。ヘリング先生の目に捕らえられた現在日本の，どんな独特な文化論が展開されたか興味があります。

法政大学で専任の英語教員としての教育実践と平行して，ヘリング先生が現役時代になさっていた実践活動を以上大まかに述べてみました。次にヘリング先生の幅広い研究活動のうち，代表的ないくつかについて述べてみたいと思います。

研究

・『江戸児童図書へのいざない』

先生は，表記の本（くもん出版）で，1988年度の第10回日本出版学会賞を佳作としてもらっています。この賞は前年10月１日からその年の９月30日までに出版された出版研究の領域における著作を対象にして選考されるものです。これはヘリング先生が十数年に渡って，新聞・雑誌・パンフレット・図録などに発表された研究成果を一冊にまとめられたものです。

その論考は，１．絵本と児童文学のあけぼの
２．絵草子の世界
３．桃太郎再発見
４．江戸の猫たち
５．海を渡った明治の児童文学

の５章に分類され整理されています。各断片が，補完し合って読み物としても楽しい研究書になっています。しかし，いずれにしても長い年月かかって書かれたものなので，当然のこととして重複もあり，著者ご自身には

不満な点もあるようです。初出の枠をはずして，自由に一気に書きなおすことが出来たら，そうしたかったと思っておられるのではと推測されます。しかし，選考委員には，「日本の専門家がこれまで見落としていた新しい発見・指摘も多く含まれている」とか，「江戸時代の出版技術がかなり高い水準にあったことを実証することにより，出版研究にも大きな貢献をするものと判断される」と高い評価を受けています。この中で３.の「桃太郎再発見」について簡単に述べてみたいと思います。

この章は，雑誌『日本児童文学』別冊「民話」に1973年に載った「どんぶらこ太平記・江戸編」と，月刊『絵本』に1974年に載った「どんぶらこ挿し絵史」，季刊『銀花』に1982年に載った「書物の中の桃太郎――新しい桃太郎像を探して――」の３編をまとめたものです。

最初の部分では，桃太郎は「日本五大噺」にも入っているけれど，例えばすでに万葉時代に伝説として伝えられていた「浦島」などに比べると歴史が大変浅く，せいぜいわずか250年ほど前，享保８年（1723）のものが現存する最古のものだとされているのに，桃太郎には次のような他と際だって違う特徴がある，それはなぜだろうと疑問を投げかけ解明しようとしています。

・資料が多いこと
・筋の変動が激しいこと
・これを元にした物語が数多く作られていること
・作者が判明しているものが多いこと

現存するものの数の多さについては，問題提起だけで終わっていますが，理由は本文から「おもしろくて多数出版されたから」と言いたいのだろうと推測できます。筋の変動の多様性については，私たちが今知っている桃太郎は，「昔噺」ではなくて「明治噺」ではないかと疑問を呈しています。つまり巌谷小波を主とする明治以降の作家の解釈した筋が「昔話」の桃太

郎として定着しているのだと述べています。享保の赤本では，桃太郎は桃から生まれるのではなく，実は桃を食べた結果若返ったおじいさんとおばあさんから生まれることになっているのです。

三つめにあげた小説の種としての桃太郎は，尾崎紅葉の『鬼桃太郎』などにも見られますが，江戸時代の作品はそれらをはるかにしのぐ多様なものです。小説化された多様な一例として，山東京伝の『桃太郎発端説話』を例に挙げておられます。鬼の扱い方，つまり鬼がなぜ悪いのかなぜ征伐されなければならないかが十分に説明がないことが桃太郎という作品の問題点の一つなのです。ヘリング先生は,「読者をうなずかせるだけのはっきりした征伐の理由がないところが，小波の権力主義的，愛国主義的な理由づけを許した」と話を発展させています。

最後にあげた作者については，作者不明のものが多い中，山東京伝，滝沢馬琴，式亭三馬，十返舎一九，柳亭種彦，仮名垣魯文等江戸後期の人気作家があげられ，近代では小波，紅葉の他，安藤鶴夫，山中恒などの名前をあげています。そして，この傾向を広く見れば，民話の収集，文芸的な採話に熱を入れた17世紀末のヨーロッパ，すなわちペローの時代を想起させると言っています。

『絵本』よりの採録の部分では，変動の部分と，前掲の山東京伝の『桃太郎発端説話』(c.1794) を詳述しています。正直者のじいさんばあさんが雀からもらった宝物を鬼が奪ったから，桃を食べて元気になった二人から生まれた息子が仇討ちに行くという，鬼退治の根拠を述べたことで京伝を評価しています。また物語と共に発展した挿絵を分類して述べています。若返った老夫婦があまりにも「美男美女」だったというのも,「お伽話」が子どもだけのものでなかった時代の文化として納得できます。またこの節では,『桃太郎金太郎雛鶴笹湯寿』という紅刷り絵本（江戸時代に疱瘡に罹った子どもに赤いものと遊ばせる習慣があったためという）に表れた三匹の家来についての言及もおもしろいと思いました。

最後の節では，初めて“果生説”と“回春説”という言葉を使い，民俗

学からの桃太郎へのアプローチを提言しています。江戸期の桃太郎像が「一人前の立派な若者に成長した」姿がきわめて多いと指摘していますが，これも読者対象が子どもばかりでなかったことを裏付けています。黄表紙の『十二支鼠の桃太郎』とか，『椿説鬼魅談語』とか，前述の桃太郎関連の物語について触れ，「江戸時代の桃太郎のイメージは，ふつう想像する以上に新鮮で明るく，バラエティと頓知あふれるものであった」と結んでいます。

この節では続いて桃太郎の近代化について述べ，明治時代の40年間に「文明開化の思想を反映する」桃太郎が，「軍国主義の騎手として」生まれ変わった様を述べています。明治20年から桃太郎が小学校の読本の教材として取り入れられるようになったこと。図工教材にも，唱歌として（明治33年）音楽教材にも取り入れられたこと。それより早く明治18年には弘文社から縮緬本として知られる英訳本が発行されていたことなども。

巌岩小波は明治27年に発行した「日本昔噺」の第一編『桃太郎』を初め10篇以上桃太郎に触れた作品を書いていますが，「小波は絶えず新鮮なものを求めて好きな題材に凝っていた」のであって，「軍国主義の種を孕んだ桃太郎像はむしろ明治大正の教科書に強く表れている」と，小波を正しく理解して欲しいと訴えています。

・*Written Texts—Visual Texts*

表記の本は「版画，近世・近代日本の印刷された伝達媒体」という副題のついたアムステルダムで出版されたものです。編著者はセップ・リンハルト氏，スサンネ・フォルマネク女史です。表紙の折り返しに以下のような解説があります。

> 日本が西洋に向けて開国した1854年に先立つほぼ150年間に日本の木版画は，技術的な完璧さにおいて，また広範囲な流通と商品化において，比類のないレベルに達していた。この素晴らしい成功の秘訣は文字と絵つまり'written texts'と'visual texts'の素晴らしい取り合わせ

（the seamless blend）だろう。

ここにヘリング先生は素晴らしい論文を載せています。'The Hiddden Heritage: Books, Prints, Printed Toys and Other Publications for Young People in Tokugawa Japan'というタイトルです。この論文の骨子は，1891年は巌谷小波の『こがね丸』が出版された年で，普通日本の児童文学史は，この年を以て日本の児童文学の誕生の年としているという説が今でも公然とまかり通っている。だが，本当にそうだろうか。なぜその説を鵜呑みにする人たちは，仇討ちという内容は江戸時代の価値観を引きずってはいるが，あれほどおもしろい，見事な木版画の挿絵を施された洗練された子どもの本が突然現れてくると信じるのだろうという疑問とそれに対する答えです。

「『こがね丸』は全く新しいものの誕生ではなく，以前通いなれた道に転換点を示した一里塚だ」と穏やかに論を展開し始めます。その後で，これでもかこれでもかと，その通念を覆させる実例を挙げていきます。

江戸時代，日本には二つの文化が併存していた。出版界も京都・大阪，江戸に二分されそれぞれに発展していった。17世紀にはすでに文と絵を同じ頁に印刷する技術が可能になっていて，フルページの絵のある印刷が市場向き価格で可能になってもいた。17世紀，18世紀には往来物と分類されていた子どもの学習用教本は教訓一色だったが，しだいに'amusement with instruction'（おもしろくてためになる）ものになっていった。商業経済の発達と共にこの方がより儲けがあることが分かったのだ，と実例をあげながら論を進めています。

例えば『算法知恵袋大全』という京都の菊屋長平衛の教科書があります。鼠算を教えたもので，母親と子どもが，お餅を食べに来た鼠を追い払っている絵があります。そこに月ごとに仕切られた枠の中に，３月は何疋，４月は何疋と12月まで書いてあって，「正月には父母二疋の鼠が12疋子どもを生む。全部で14疋。２月には子もまた子を生む。親と合わせて98疋。月

に一度は親子孫夫々12疋生む。12月には合わせて276億8257万4402疋也」と説明されています。わくわくするような楽しい算術の教科書だったに違いありません。

子ども向けのこういう出版物があったということです。

子どもの本として大人の本のダイジェスト版が多かったのは西洋でも同じです。この論文には歌川国芳絵の『仮名読八犬伝』（1840年代）が紹介されています。プレゼントの他に，先に述べたお呪(まじな)いや厄払いとしての用途もありました。暖かい赤い色をした紅刷り絵本はまた，疱瘡絵本とも言われ，回復期の子どもの読み物でした。外に行けない子どもは病床でこういう物を読みふけったのでしょう。今こういう物が残っていること自体が奇跡のような貴重なものですが，揺るがぬ物的証拠です。

ヘリング先生が子どもの本の画家として特に高く評価しているのは小林清親で，江戸から明治にかけて活躍した人です。清親は，古典的な版木に絵を描く方法を貫き，絵本，掛け図，双六など多くの物を残しています。

本来の木箱を使う双六は大人の遊び道具でしたが，絵双六は子どもの文化と言っていいでしょう。絵双六は，論理的に発展していくストーリィがあり，その枠の中に機知に富んだ構成のテキストと洒落たイラストレーションが組み合わさっており,「チャンスと不確かさと興奮とで多肢選択式のコンピューターゲームを思わせるような多元的な要素で味付けされている。…野心的な双六は伝統的でない形の，つまり特大の紙面一枚に印刷された本として,再評価するに値する。」絵双六を子どもの本の先駆けの一つだと位置づけているのです。

『落ち穂ひろい』という名著で,双六が子どもたちにどんなに大きな喜びを与えていたかを述べている瀬田貞二氏もここまで大胆には言い切ってはいません。

明治以降の双六作家には，幸田露伴，尾崎紅葉，巌谷小波らが名を連ね，絵描きには北沢楽天，鏑木(かぶらぎ)清方，川端竜子，竹久夢二らの名前があがっています。雑誌の付録として双六がつく習慣は昭和30年ぐらいまで続きまし

た。

一枚の紙面に印刷されているもう一つの美しい印刷物があります。それは，見て楽しみ，切って組み立てて作る喜びを味わい，できあがったら読んで楽しむ豆本になるための印刷物です。1850年代半ばに落合芳幾は少なくても7種類の豆本の刷り物を出版しているそうです。こういう子どもの出版物は，驚くほど西洋の子どものための本の出版に類似しています。ヘリング先生は，「カラー印刷への進展，溢れるばかりの挿絵の使用，読者の喜びそうな人気のあるお伽噺の多用などは，同時代のヨーロッパよりも進んでいた」と言い切っています。

その他の子どものための出版物の特徴として，出版社が，一貫して「おもしろくてためになる」ものの出版をしようという姿勢だったこと，そして，著者・編者が難しい孔子の教えでも易しく日常のレベルまで落として，気軽に近づけるものにしたことにより，18，19世紀の子どもの本は広く積極的にその役割を果たしたと論述しています。町人文化の発達した社会で，徳川時代の日本の商業経済に支えられた本の生産の伝統が，明治期に受け継がれて，『こがね丸』に結集したという説得力は十分です。

・『知恵の曙』

ヘリング先生はたくさんの図録を編纂しておられますが，先生がなさった仕事の中で最も大部な物は *The Dawn of Wisdom: Selections from the Japanese Collection of the Cotsen Children's Library* ではないかと思います。コットセン子ども図書館に所蔵されている，日本国外では最も素晴らしい，子どもの本と子ども向け出版物の総合的なコレクションの日本児童出版通史です。この図書館はカリフォルニア州，ロサンジェルスにある数少ない海外のリサーチ・コレクションです。（今はプリンストン大学に収蔵されているそうです。）前書きによりますと，本，雑誌，印刷された遊具，ポスター，遊び絵，パネルシート，教材，カルタ等々の10,000点を超える収集があり，それが年々増え続けているというのです。そのコレクションの一部

がここに収められています。

子どもの本の歴史を調べる人のためばかりでなく，印刷の進歩，グラフィック・テクニックの歴史を調べる人にも興味ある場所のようです。現在この図書館では質の高い貴重な，視覚的にも美しい，しかも歴史的に意味のある物を重点的に集めているそうです。

先生の書かれたこの「通史」は，1．平安から徳川まで，2．明治時代，3．大正デモクラシーからの20年間，4．ナショナリズムから戦争に至るまで，5．1945年以降の復興期の5部で構成されています。その間に日本で生まれ，運良く生き残り，その価値を知る誰かによって購入され，はかない紙の運命を終える前に，この図書館に収納された数々の名品に歴史を含めて解説を書いておられます。既に触れたように，その価値を知り，いにしえの人々の美意識と技術力，そして，作品誕生までに込めた人々の情熱に深い理解と愛着をお持ちの先生ほどこの仕事の適任者はいなかったでしょう。

そればかりか，例えば，桃太郎，舌切り雀，ぶんぶく茶釜等を説明する時，自然に比較として，「シンデレラ」，「長靴を履いた猫」，「赤ずきん」などが出てくるのですから，先生には何よりの強みがあります。この仕事だけでも，ヘリング先生が日本語を学ばれ，日本に来て，日本の「昔」の出版物を収集研究なさったことの意味があるように思います。

それにしても，日本人として（ヘリング先生はこういう言葉が大嫌いなのは知っています。「何人（なにじん）なんていない。みんな人間だ」とおっしゃいます。でもあえて言わせていただくと），つまり日本で生まれて，こういうことに触れる機会はずっと多くあったはずの私たちが，これだけの智の遺産に気づかずにいたのは残念としか言いようがありません。でも，遅ればせながらこうして気づかせてもらったこと，そして，日本にではないけれど，同じ地球上のアメリカに，日本で生まれた宝物が大事に保存されていることに感謝するべきでしょう。

・『千代紙の世界』

講談社インターナショナルから出版された英文・和文の本です。英語の題は *The World of Chiyogami Hand-printed Patterned Papers of Japan* です。先生が，千代紙に引かれたのは，留学生のころからだそうで，巻末に短くあげられた謝辞を呈すべき人々のお名前を見ただけで，どれ程長く，愛着を持ってこの収集と研究を続けてこられたかが分かります。江戸時代から，あるいは明治初期から生き残った，手刷りの千代紙の貴重さについて知り尽くした先生から生まれるべくして生まれた本だと言っていいと思います。千代紙とは，から始まって，その用法・製法，パターンの歴史・意味，研究書，歴史にいたるまで論述しています。

英文で西洋の方々に解かってもらうだけでなく，そういう文化の中で生まれ育ってきた私たちにも価値ある本だと思います。全部がカラーでないのは残念ですが，見てほっとする美しい本です。

翻訳

・『猫のフォークロア』

ヘリング先生は無類の猫好きでもあります。そんな先生にぴったりの本を日本語に翻訳出版したのが『猫のフォークロア』です。英語圏での20世紀最大の民話研究家であるキャサリン・メアリー・ブリッグズ博士の *Nine Lives-Cats in Folklore* を日本語にしたもので，後書きの前に少し長いブリッグズ博士と作品とに関する解説があります。古代エジプトの猫崇拝のことから始まって，英米の近代文芸のなかの猫まで描かれています。訳者として題は最も重要で気になりますが，先生の決断で，副題をタイトルとして使われたというのは，この本にとって幸せだったと思います。また，わらべ唄と猫の章では，例えば，「にゃんにゃん猫さん」というような穿った訳が印象的です。

・『奇想天外でおもしろいハプティダンプティの本』

ここで紹介するもう一冊の翻訳本は，武井武夫氏の精巧な美しい挿絵にふんだんに彩られた楽しい英国伝承童謡23編が収録された可愛い本です。（マダーグースの本といったらわかりやすいのですが，ヘリング先生はここでその言葉を使うのをお嫌いのようです。）

こういう類の物の出版には，編集者がどんな唄を選ぶかが最も重要になります。編訳者としてヘリング先生は，ご自分の家族の体験からも選んでおられ，後書きではお母様に感謝しています。「ロンドンばしがながされる」「ジャックのたてたやしき」の二作は原詩の調子のいい流れるような英語では全く気にならないのですが，とにかく長いので，日本語にするとどうしてもだらけてしまいます。でもこの二作とも調子のいいメリハリのある訳で，だらけた感じがしないのはさすがです。画家の武井氏と楽しんで作っておられるのが感じられるのもおもしろいです。（最後の頁にこっそりお二人が出てきます。）それに「メリーさんのおにわ」に座ったお嬢さんたちの中に，ヘリング先生のお嬢さんのみどりさんが描かれているというのも楽しいです。「三人こうしゃく」で，お嫁さんを探しに来た公爵に見初められた可愛いお嬢さんの名前もみどりちゃんでした。最後の４連です。

およめさんの　ことなら
わたしたちで　いかが
およめさんのことなら
わたしたちで　どう？

あんたがたは　いやだよ
どろんこじゃ　ないか
ぐうたら　むすめじゃ
おことわり

おとのさまがたと
ちっとも　かわらない
きれいな　ひとも
いるわ　よくみてね

よくよくに　みたら
やっぱり　いたぞ
みどりちゃん
きみに　きめた

アメリカに預けてある娘さんのことを書いた記事もどこかで読みましたが，この伝承童謡の中に歌い込まれ，描かれた小さいころのお嬢さんの姿は，先生の一生の宝物でしょう。仕事一筋に，様々な素晴らしい人との出会いもあったことを数々の後書きで述べておられますが，決して平坦な道ではなかったでしょうヘリング先生の，日本での半世紀近い生活の中で，お嬢さんが終始変わらぬ慰めと喜びの源泉だっただろうと思うと，私まで心暖かくなります。

勇気

もう一つぜひ言及しておきたいことがあります。それは先生の勇気です。『月刊絵本』1974年12月号，に「ちびくろサンボ」特集が載せられました。差別用語が厳しく指摘された時代でした。翻訳を始めて間もなかった私も，例えば,「びっこを引き引き」や「視野が狭い」や「片手落ち」などという言葉は使ってはいけないときびしく言われ，別の言葉で書き直させられたような時代でした。「ちび」「くろ」と二つもタイトルに「差別用語」のはいったこの児童書はけしからんということになったのです。この特集で10人の児童文学者（作家，研究者）がどう見るかを問われました。この中で

たった一人ヘリング先生だけは反「サンボ」派に立ちませんでした。やがて，狂った嵐は静まり，世の中が再び冷静をとり戻した時，子どもたちの好きな『ちびくろサンボ』が復活しました。書店や図書館から消えていた本がまた書架に並び始めました。あの時代にこぞって反対した先生方はきっと面映ゆい思いをなさったことでしょう。それにしても，荒波の中でじっと真実を見つめ通し，自説を変えなかったヘリング先生は立派でした。

終りに

最後に，大学という社会で同時代を生きた私の目に映った先生ご自身のことに触れておかないと，私の責めが果せていないような気がします。長いこと同じ職場にいながら，学内で，あるいは学部内でこうして先生をご紹介する最適任者が私だっただろうかと自問すると，自信がありません。何かとスムーズに行かない人間関係が多く,「苛立ち」と「疎外感」のぶつかり合いが多々あったことは何度となく断片的にいろいろな人から，あるいは先生ご自身から聞いていました。だから余計に，そうした人間関係に巻き込まれるのを避けて，私自身，どこかで常に「控えて」いたような気がします。

「日本」の文化を理解しようと人一倍努力なされた先生には残念だったでしょうが，その文化をはぐくんできた人々の末裔である身近な「日本人」との間には確かに深刻な理解不足があったのだと思います。その責めは何に帰したらいいのでしょう。心を開かなかった私たちもいけなかったと思います。先生の時間観念，学生と接する際の独特の教育方針…。早い時期にこんなことも話し合えたらよかったと思います。そうしてお互いに「いい関係」になっていたら，学生も教職員も，博識な先生からより多くのことを学ばせていただけたと思います。

でも，今回，先生の業績の一端を見せていただいて，私は本当に頭が下

がりました。この文化的遺産を持つ私たちは，もっと世界に貢献できるはずです。もっと寛大になり，誇りを持って日本の文化を称え，次代を担う子どもたちに大きな夢を与えてやれるはずです。このことに気づかせてくれたヘリング先生に感謝いたします。